

揮毫 福田康夫 元内閣総理大臣、中友会最高顧問

since 1996 DuanPress
日本僑報社発行

問い合わせ先 中友会事務局
豊島区西池袋3-17-15 湖南会館
Tel : 03-5956-2808
Mail : zyh@duan.jp



中国の最新発展を知る上で 欠かせない一冊

『新質生産力 中国的DXの最前線』監訳者・高久保豊日本大学教授に聞く



高久保豊教授が監訳を務めた『新質生産力 中国的DXの最前線』は、日本大学図書館に収蔵された

中国経済の新たなキーワードとして注目されている「新質生産力」。これは、AI、次世代通信、バイオ、ビッグデータ、IoTといった先端技術を核に、従来の投資主導型モデルから脱却し、イノベーションを原動力とする「新しい発展体制」へ移行するための国家戦略です。

この重要テーマを、人民日報の記者が現場から克明に取材しまとめた人民日報叢書 vol.6 『新質生産力 中国的DXの最前線』が、日本僑報社から刊行されました。監訳を務めたのは、中国経営論・東方管理学の第一人者である日本大学商学部教授の高久保豊先生です。

今回は高久保教授に、「新質生産力」の本質と本書の意義についてお話を伺いました。

■「新質生産力」とは何か——中国的DXがめざす転換点

「新質生産力」という言葉は、2023年に習近平国家主席が視察先で初めて提起し、2024年には国家方針として正式に位置づけられました。その核となる要素は次の三つです。

- 1.科学技術イノベーションの自主推進
- 2.未来産業の創出と既存産業の高度化
- 3.人材・教育・データといった新しい生産要素の質的向上と最適配置

いずれも「国家レベルのDX」、すなわち中国がめざす新しい社会モデルの中核を担うものです。

人民日報叢書である本書は、2025年初めから半年にわたって、AI製造、量子通信、グリーンエネルギー、宇宙産業、医療テックなど、多様な現場を丁寧に取材し、豊富な写真とデータによって「動いている中国」を視覚的に理解できる一冊となっています。

■インタビュー

「中国では、未来の社会がすでに日常として動いています」

日本大学教授 高久保 豊

——中国を訪れるたびに、技術の進展に驚かされると伺いました。

高久保「毎年中国を訪れるたびに、社会の変化の速さに驚かされます。2024年には完全無人運転の車に試乗し、

走行中に座席の自動マッサージを体験しました。2025年にお会いした企業トップは、会話の最中にAIを自在に使いこなし、最新の分析をその場で示してくれました。こうした場面に触れるたびに、中国ではすでにテクノロジーが社会に自然に浸透し、人々がそれを前提として生活していることを強く実感します。

私は、こうした“社会の息遣い”こそ、新質生産力の重要な側面だと考えています。」

■「議論よりも実装。中国の特徴はその“速度感”です」

——日本では「社会実装」がしばしば議論になりますが、中国は実装が早いと言われます。

高久保「そうですね。中国では『どの技術を導入するか』ではなく、『導入された技術をどう使いこなすか』という段階に入っています。日本の読者の方々にも、この“速度感”的違いをぜひ実感していただきたいと思います。

本書に描かれた現場には、最先端企業だけではなく、町工場、農村のインフラ、地域医療、公共サービスなど、社会のすみずみにテクノロジーが浸透しつつある姿が記録されています。こうした点に、中国の社会変革の広がりを見ることができます。」

■歴史の流れから見る「新質生産力」

高久保「新質生産力という概念を正しく理解するために、中国の改革開放以降の歩みと照らしてみる必要があります。

- ・1980年代末には『科学・技術は第一の生産力』という画期的なスローガンが掲げられました。
- ・2000年代初頭には、自主イノベーション能力の向上が強調されました。
- ・2020年代に入ると、AIやビッグデータが急速に進展し、環境との調和を重視するグリーン発展が国家

戦略に据えられました。

そして2023年に『新質生産力』が提起されました。これは、単なる技術の高度化ではなく、技術・自然・人間が共存する新しい文明モデルを構築しようとする試みだと私は理解しています。」

■「本書は、未来を形づくる“人間の物語”を伝えています」

——本書を読むうえで、特に注目すべき点を教えてください。

高久保「本書の最大の魅力は、最先端技術そのものだけでなく、その技術を動かしている“人間”に光が当てられている点です。挑戦を続ける若い研究者、新市場を切り開こうとする企業家、社会課題の解決に取り組む自治体の担当者……そこには、未来を形づくろうとする努力や希望が生き生きと描かれています。

私は、難しい理論から入る前に、まずは現場の息遣いに触れていただきたいと考えています。驚き、感心し、学び、考えることから始める——それが新質生産力を理解するための第一歩です。」

■本書の価値——日本の読者へのメッセージ

本書は、

- ・中国のテクノロジー社会が何をめざしているのか
- ・国家政策が産業の現場とどのように結びついているのか
- ・“中国的DX”が社会全体をどう変えようとしているのか

を、多様な実例を通じて立体的に理解できる一冊となっています。

中国の現在と未来をつかむうえで、本書は欠かすことのできない書物だと言えるでしょう。



高久保 豊 (たかくぼ ゆたか)

日本大学商学部教授。

1964年生まれ。1991年、慶應義塾大学大学院商学研究科後期博士課程単位取得退学。1992年、日本大学商学部助手。2004年より現職。一般社団法人日本勤労青少年団体協議会会長、公益財団法人アンタレス山浦財団理事長、日中関係学会理事、東アジア経営学会国際連合 (IFEAMA) 常任共同事務局長を歴任。専門分野は中国経営論、東方管理学、デジタル儒商。著書に『新中国70年の変化と発展』(共著、日本橋報社、2019年)、『現代アジアの企業経営』(中川涼司と共に著、ミネルヴァ書房、2017年) ほか。





中友会会員による
中国滞在体験談

私の中国物語

「私の中国物語」その①

中国が生んだ家族

医師 木俣 肇



アレルギーのテストを行っている若い頃の筆者。プリックテストという、皮膚のアレルゲン液を落とし、特赦な針でこする膨疹反応を測定する方法で、採血の痛みがなく、赤ちゃんから高齢者まで簡単に測定できる

私の両親は日本人であるが、中国に行き戦争中滞在していた。しかし父は軍医で母も医療関係者であったので、終戦後でも中国に強制的に抑留された。当時は医師不足で、中国では日本人でも医師が重宝された。当時は敗戦の混乱もあり、多くの日本人が中国に残った。しかし父母は延々と終戦後8年も滞在し、滞在中に出会い結婚した。

それだけ長期間に滞在した日本人は例外的である。理由の一つは、父の帰国の順番がきたとき同僚に譲ったからである。父の同僚は医師の資格なしで、医療行為をしていた。もちろん違法であり、それが判明すると当時の中国では厳罰になる。そこで父の帰国の順番がきたが、その方に懇願され帰国を譲った。残った父に帰国の補償はなく、ずっと中国に滞在する可能性もあった。しかし人の命の重みを感じた父の善行である。その為、長年の試練の連続となる。しかし中国の人達は分け隔て無く、父母は中国人の方達とも生活では協力しあっていた。いわば地域のチームプレーで、人々は生活していた。物資

が少ない時代で、中国の方も必死で生きていたし、日本の方も抑留ということを忘れて協力していた。父母の話からは不自由さはなく、生きることにおおらかな様子が見られる。国籍を凌駕して、生きていく逞しさがあった。技術が未熟な時代で、農耕や狩猟で生活の糧を得ていた。しかし酒はたくさんあった。父は酒が好きで、中国の人々とのコミュニケーションでは酒はなくてはならないものであった。その習慣は帰国後でも役だった。友人の酒を酌み交わしての団欒は、疲れを癒やしてくれる一時であった。父母は中国で医療従事者として働き、それなりの収入も得た。しかし帰国にあたって費用がかかり蓄財は殆どなかった。そして昭和28年に私が生まれたが、すぐには帰国できず、生後半年してようやく帰国ができた。だから私の出生地は中国で、中国に滞在したことになる。父母も中国で出会い、私も中国で生まれ、中国が私の家族を生んだ。

父は帰国後に中国に滞在した日本人達で会をつくり、年に一回集まり再開を喜びあっていた。会報も作り、父もよく寄稿していた。会員でいつか中国を訪れようと計画もしていた。私は両親よりよく中国の話をきかされた。両親とも中国語は堪能で、父は胡弓をひきながら中国語で歌うのが好きであった。また中国の自然の壮大さには憧れていた。対岸が見えない大きな川、そびえ立つ巨大な山、どこまでも続く広大な野原等、日本では見られない情景を思い、中国に思いをはせた。生活もそういう自然と融合して健康的である。こういう中国らしさは、もしかすると乳児期に体験した記憶が体に残っているのかもしれない。

両親から聞いた中国の話は、どこまでも壮大である。言語も多種類あり、同じ中国でも南と北の人々では、方言も違い、食生活も違う。その為、遠方の方達が交わる場合、相手の地域の言葉や食生活をあらかじめ調べておく。また中国の文化やスポーツや音楽は多種多様である。

中国独自の文化としての曲芸は、先祖代々続くもので、そのバランス感覚を養うために、赤ちゃんの時でも戸外で大人がゆるやかに赤ちゃんを投げて受け取る。もちろん下に安全マットとかはない。落ちれば大変であるが、落ちるという概念がない。そうして赤ちゃんでも空中での感覚を鍛える。中国はスポーツ大国であるが、中でも卓球はすっと世界の覇者である。広大な国土に多くの人口で、そういう方達が幼少児から卓球になじみ、国をあげて訓練される。母集団が大きい分、当然頂点では優れた方達が君臨する。音楽も中国独自の楽器があり、世界的な演奏者も多く、素晴らしい音色をインターネットで聴ける。それも伝統と中国人の才能のなせる技である。

そういう壮大さが両親のおおらかさを作った。父は豪放磊落な人であった。あれだけ苦労しても、中国生活を語る言葉はいつも笑顔に満ちていた。帰国して開業したが、全く資金のない所から、借金して設備を整え診療した。患者さんとの交流もよく、病気のみならず生活も指導する田舎の名医であった。母も実家から遠ざかる生活

で、仕事に明け暮れる中で私を出産し育ててくれた。日本でも開業医の父を支え、仕事をしながら家事と私の育児をせっせとしてくれた。診療室と食事の場はすぐ隣で、診療の合間に食事を作り私に食べさせてくれた。仕事が終わり片付けをして、それから家事をして、朝も早朝から起きて家事をしていた。でもいつも笑顔であった。

父母は慈しみの人であった。患者さんや隣人にも怒ったことはなかった。あれだけ苦難の生活をしてきて、日常生活で不満を言わず他人を思いやることができるのは偉い。それも中国の壮大さがなせる技であろう。父母は中国を訪問することはできなかったが、私は生まれ故郷を訪ねてみたい。父母の位牌を持って。

木俣 肇 (きまた はじめ)

1953年中国生まれ。1977年京都大学医学部卒業後、1985～1988年米国UCLA留学。2014年からアレルギー科木俣肇クリニック院長。2015年イグノーベル賞受賞。現在は、ステロイドホルモンやプロトピックを一切使用しない治療で、アトピーや他のアレルギー疾患を診療。ステロイドを使わない治療を求めて、他府県からも多数の患者さんが受診している。

「私の中国物語」その②

チャンリヤンファン

張蓮芳を探して

経営者 山本 深雪

1994年、33歳の私は都内のアパレル企業の企画として、忙しい日々を送っていた。ファッショントリニティの仕事は一見華やかで、女性の能力が生かせる数少ない業種だった。しかし、バブル経済が弾けた日本には暗雲が立ち込め、私はこのままここで働いていいのだろうか……キャリアアップのために何かもうひとつ得意なものを身につけたいと考えていた。

その頃、香港に行く機会があり、海の見えるホテルで憧れのチャイナドレスを仕立てていた時のこと。ふと中国大陸の方角に目をやると、あたかも数頭の馬が砂埃を撒き散らしながら私の方に疾走してくるイメージが浮かび上がった。「あっ！ これから中国の時代が来るのかも！」

この頃は衣料品の生産工場が日本から中国に移りつつあり、二年後には英国から香港返還という一大転換期を迎えるため、中国も大きく変わろうとしていた。そして

「私も人生をリセットしてみよう」と決断し、勤めていた企業を退職して、中国に留学することに決めた。

1995年の秋、上海師範大学中国語学科に入学した。周りは20代の学生ばかりだった。私は早く仕事に戻りたかったので、二年間の留学期間は勉強に集中した。また時間を見つけては、北京や西安など歴史の名所を訪れたり、太極拳にもチャレンジした。

放課後はフランス租界のある瀟洒な衡山路を抜けて、淮海路に行くのが好きだった。東京で言うなら『銀座通り』、日系の店も数多くあり、ファッショントリニティが一番栄えていたエリアだ。私は、美美百貨というファッショントリニティをよく覗いていた。

ある日、PRADAの店内で「ナニカオサガシデスカ？」と、私より少し若く清潔感のある女性の店員が優しく声をかけてくれた。私が「日本語が上手ですね」と言うと、彼女は恥ずかしそうに「イエ、マダマダデス」と答えた。

そこで私は「日本語を勉強したいですか？」と聞くと「ハイ、ベンキョウシタイデス」と答えてきた。そこで今度は私が中国語で「では一緒に勉強しませんか？」と誘ってみた。

彼女の名前は張蓮芳。日本人のようななしとやかな女性だった。私達は時々カフェで待ち合わせ、日中の教科書を交互に読み合って録音し、作文を添削し合った。時には写真館で一緒にメイクをして記念写真を撮ったり、市場をひやかしたりしながらおしゃべりをした時間は、とても心豊かで楽しいものだった。

私が学校を修了して今後の進む道を考えている頃、張蓮芳もまた自分の将来を考え転職をした。新しい会社の研修合宿先から、辛いけど頑張っているという手紙を送ってくれた。しかし、その頃から急激に上海地区の開発が始まり、彼女の家は市内から郊外に立ち退きせざるをえなかった。同じ頃私も日本に帰ることを決めて、住所を交換する間もなく私たちは会えなくなってしまった。当時はまだ携帯電話も普及しておらず、メールも繋がっていなかった。

2000年に帰国し、中国との貿易を始めて忙しい日々を送るようになった。中国の発展は目覚ましく、私もその階段を駆け上りたかった。しかし年老いた両親を介護する時間がだんだんと増え、日本と中国を行き来することができなくなっていた。気が付けば長い年月が過ぎて、いつの間にか私は還暦を迎えていた。

2022年、ふとした縁があってビジネス専門学校で、留学生にビジネスマナーを教える仕事を受け持った。中国各地からはるばる日本に来てくれたのだから、私は自分の体験を織り交ぜて、進学や就職に役立つことを熱く

なって語った。未来のある若い彼らが、日本と中国の架け橋になるよう願いながら。同時に、はるか昔に上海で学んだ教室、教師たちの優しい笑顔、賑やかな街の喧騒を思い出していた。

そんな時にふと、張蓮芳はどうしているだろう。今ごろ結婚して子供がいて幸せに暮らしているのだろうか。もう一度会うことができたらどんなに嬉しいだろうと思い、SNSで彼女の名前を探してみた。けれども14億人の中から彼女を探し出すことはできなかった。この春に専門学校を卒業した学生が、「先生、僕らが彼女を探してあげるよ」と希望の言葉を残し、そして笑顔で中国へ帰って行った。

私が中国に留学すると決断した時、周囲は驚いて反対もした。日本と中国は歴史も文化も違い、傷付け合った悲しい過去がある。でも、私は自分の直感を信じた。今、その選択は間違っていなかったと思う。あの頃上海は経済の夜明け前だった。今その太陽は真上に来て燐燐と輝いている。これから二つの国は月と太陽の如くお互いを補い合う関係になると思う。片方が陽になった時、もう片方が陰になり支え合うように。

そして今、私に新しい仕事が舞い降りて来て、また上海とつながった。これをきっかけに好朋友、張蓮芳を探す旅に出かけようと思っている。30年の時を超えて、奇跡を信じて。

山本 深雪（やまもと みゆき）

1961年東京都生まれ、三鷹市在住。恵泉女学園短期大学 英文学科卒業後、住友商事㈱に入社（鉄鋼貿易部）。その後、㈱インパクト21にて、アパレル企画・マーチャンダイザーに従事。1995年上海師範大学国際交流学科に入学、1997年卒業。2000年に帰国して起業し、中国との貿易、美容サロン、薬膳中華レストランを経営。現在は、主に美容業と外国人就活サポートを営んでいる。



作品の主題でもある中国友人「張蓮芳」に誘われて、一緒に写真館で撮影したアルバム。私の30代の記念であり、上海の想い出の詰まった一生の宝物である

「私の中国物語」その③

日中「次の45年」への提言 ～刮目せよ 日本人、見直せ 漢字パワー！～

旅行作家 中嶋 健治



上写真は、香港での結婚式の様子（2016年1月）。日本からは両親が、中国・香港からは友人たちが駆けつけてくれた。後方は、雲天下の香港島・摩天楼とヴィクトリア・ハーバー。

中国に行くと、私の姓に含まれる漢字「嶋」を知らない方々が多いことに気付かされる。簡体字の「島」が常用されているためだ。

こうした事情から、長い間、この文字は日本人が独自に創造した和製漢字（畠、枠、込、巣、渋など）の一種だと思い込んでいたが、調べてみると、古くは紀元前の歴史書『史記』にも言及されるくらい、伝統ある語句という（『史記・田横傳』入居海嶋）。この漢字は会意兼形声文字に属し、象形文字の「山」と「鳥」の合成体で、“渡り鳥が立ち寄る海中の山”を意味する語句として「島」とも記されてきたようである。

さらに中国の旅先では、所謂、こうした水中に浮かぶ「島」に関し、〇〇山、〇〇島、〇〇嶺、〇〇岩、〇〇石、〇〇塙など、多彩な呼称が存在することにも驚かされる。日本語の「川」に相当する河川も、〇〇江、〇〇河、〇〇水、〇〇渓などと多岐にわたり、「山」についても〇〇山、〇〇嶺、〇〇崗、〇〇石、〇〇尾、〇〇坡、〇〇婆、〇〇頂などの名称が多用されている。日本語では単に「〇〇島」「〇〇川」「〇〇山（岳）」としか記さ

れないが、中国では実に多くの呼び方が存在するのだ。

「言語は文化の鏡」と言われるが、このような多彩な表記習慣は中国文化の包容力を示す好例のように感じる（道教など）。約3000年前に誕生した漢字は、時に新単語を自己生成し、また時に別の漢字と連結して熟語（中国語では“詞”という）を形成させたり、発音を基に人名や地名に「当て字」を用いるなど、柔軟なコミュニケーション・ツールとして機能してきた。長い時間をかけて他部族（国）を呑み込みつつ、集合体的な文化圏を作り上げていった中華文明の確立に大いに貢献した漢字は、主に記号的な書き言葉として重宝され、結果的に、今でも全く口語が通じ合わない方言を中国各地に数多く存続させているわけである。

実際、現地滞在の度に、日本では見られない、地元の方々の積極的で好奇心旺盛な言動に、いつも感心させられてきたが、こうした寛大でパワフルな国民性も「漢字＝中国文化」が持つ包容力や柔軟性の一端だと認識すると、すとんと腑に落ちるような気がする。ただし、気さくで親しみやすいが、身内と部外者との明確な線引きは常に意識的、無意識的に保持しており、さすが多文化共存の極意を遺伝子レベルで体得している大陸系民族だなあ、と痛感させられることも多いが。

日本列島もその中華文明圏の東端に位置したことから、もともと口語だけだった母語の中に書き言葉として漢字を輸入し、国土を大いに発展させてきた。そして、ある程度の文化的土台が整った後、文字の独自発展が進むようになり、仮名文字が発明され、さらに前述の和製漢字・漢語（熟語群）の創造へと繋がっていくわけである。明治維新以降、150年間にわたって日中経済力の逆転が生じると、日本は独自の文化的センスにより新しい漢語（経済、法律、文化、共産主義、服務、人気など）を数多く生み出し、それが中国へ逆輸入されていくこととなる。

そして今、この逆転現象もついに終焉を迎える、中国発のハイテク製品や資本投資などが日本へ大量流入している。今後もますますこの傾向は拡大し、十数年も経てば、日本列島内で中国発の新単語や用語がかなり併用されて

いることだろう。もともと歴史的に圧倒的な経済&文化大国だった中国の復権にあたり、我々日本人は謙虚に現実を受け入れ、先進的な文物を学ぶ姿勢を改めて持ち直していく、転換期を迎えるつあると考える。同じ漢字文化圏としての優位性や日本語独自の仮名文字を駆使し、積極的に自己成長のための交流と研鑽を積んでいきたいものである。過去の栄光や成功体験にとらわれてしまうと、所謂、大企業病のように臨機応変が効かなくなり、平成期に見せつけられた数々の大企業グループの没落と同じ轍を踏みかねない。

筆者も今年、45歳となる。まさに、日中平和友好条約と同じ年月を歩んできた人生だった。

この間、日中の経済関係は劇的に変化し、同時に日本人の対中観も大きく変わったことを痛感する。大学生時代までは、メイド・イン・チャイナの製品を見下す風潮が日本全体に確かに蔓延していたが、大学院在籍中だった2001年12月に中国のWTO加盟が実現し、そのまま中国ブームが到来する。そして社会人になって10年は

が経過し、GDPが日本を抜き去る瞬間にまで立ち会った。これから45年は、その差がますます拡大する未来を目にしていくことだろう。

この前後90年間もまた、2000年以上に及ぶ日中関係史の中では、ほんのわずかなイベントにしか過ぎないのだろうが、漢字文化が有する包容力と応用力を共に熟知する隣人どうし、お互いの独自文化を尊重しつつ、友好交流と共同発展をますます深化させていく軌跡を、残りの人生を通じ、凝視し続けたいと思う。そして個人的にも、在野の中国史愛好家として微力ながら、相互理解の前進に寄与していければと考えている。

中嶋 健治（なかしま けんじ）

1978年、兵庫県生まれ。慶應大学経済学部卒、早稲田大学大学院 社学研修了。南アフリカ・Midrand大学（現Eduvos）留学後、東京で貿易仲介サービス会社を起業。2009年、拠点を中国・深圳市へ移す。以降、歴史紀行サイト『大陸西遊記』を起草し、現在も執筆中。文化庁「第3回メディア芸術データベース活用コンテスト」最優秀事例、第5回自民党「国際政治・外交論文コンテスト」幹事長賞など受賞。共著『「グローバルチャイナ」の現在』（大学教育出版、2010年）。

「私の中国物語」その④

一日一日が楽しくなる北京生活

大学生 大塚 笑

こんにちは、私は北京外国语大学中文学院4年の大塚笑です。私が高校3年生の時、この大学に入学する事が決まってから、4年間母国を離れての大学生活への期待で胸がいっぱいでした。

しかしこロナにより入学時から中国で大学に通うという計画が崩壊されました。入学時から日本に留まらなければならず、毎日家でオンライン授業を受ける日々を過ごし、大学の学生に会えず、数年間も孤独を感じる生活を送りました。家族以外の人に会う事はほぼなくなり、コロナ前よりも自分が内気な人になった気がしました。いつになったら中国に行けるのか、この先どうなってしまうのかという事で頭がいっぱいでした。

そして4年生が始まる前に、自分の一つの夢であった中国に行く事が出来ました。中国に渡ってから、本格的な学校生活が始まり、オンライン授業やイベントが続々と開き、学校内で多国籍の方と出会う事が日常茶飯事に



北京市にある国貿商城で行われた北京に滞在している外国人が中国の伝統芸能「相声」を体験するイベントに参加した際の写真（2列目の1番左が筆者）

なりました。また、毎日中国語を使用する環境に浸っているため、自分の専攻である中国語が飛躍的に向上しました。中国に渡ってからまだ数ヶ月しか経っておりませんが、私が現在まで送った中国での生活で得た事は、友人が一人増えれば道が一本増えるという事です。学校内外に関わらず友達を作る機会はどこにでもあります。

例を挙げると、今年の冬休みに大学の留学生と重慶に旅行に行った時のことです。私が一人で昼食を食べていた際に、突然20代くらいの男性が私の目の前の椅子に座り、料理を注文しました。彼は私と友達になりたいような感じだったので、私が中国語で自己紹介をすると、「君の中国語はすごいよ！　君に会えたのは本当に奇跡だ！」と言ってくれました。私は彼の言葉を聞き、とても胸が弾みました。彼との会話で、中国人は友人をすごく重視する事を彼は言及しました。生粋の中国人である彼は中国での生活は今昔に関わらず誰でも絶対打ちのめされるような困難な時期を経験しなければならないが、友がいるからこそ乗り越えられる、また友が多いほど、自分の人生を豊かにすると言いました。

私が中国に来て中国人と話していると、中国での生活は大学受験、就職、結婚など尋常ではないプレッシャーがある事を身に染みて感じます。また大学で中国史を学んで、中国は無数の波瀾万丈の歴史を繰り広げている事に気が付きました。これらだけでなく、中国には友情を歌った曲周華健の「朋友」のような友情を歌う名曲があります。そのため、中国では友人をとても大切にする伝統的な考えがあるのではないかと思いました。

私は中国で中国人だけではなく、韓国、東南アジア、ヨーロッパなど私と共に中国語を学び、自分の夢に向かって走る友達が出来ました。彼らは私と同じ大学に通っていても、今まで経験してきた事や好きな事、価値観、将来の目標は十人十色です。彼ら一人一人と接していると、彼らの自分なりの「色」や「道」が見えます。

例として、オマーン人の友達がいます。彼女とは大興

国際空港で行われた元宵節の文化体験イベントで出会いました。彼女はとても優しく明るい性格を持っており、日本のアニメや漫画が大好きであった為、日本人の私と出会い、友達になれてとても嬉しかったと言っていました。その後、彼女は留学生の寮で私にオマーン料理を振る舞ってくれました。彼女を通じて、国の文化に触れる事ができ、私の事を心から気にかけ愛してくれる友達が出来ました。正に、友人が一人増えると道が一本増えます。新しい人に会う度に、新たな「道」を発見し、自分の人生が彩られます。「友達づくり」が正に私の留学生活での一番の楽しみです。

しかし私が自分の一番の楽しみは友達作りというと、私が毎回自分から積極的に知らない人に話しかけ、すぐに打ち解ける力を持っているように思われるかも知れません。でも実は自分が相手と友達になりたいと思っても、まだまだ内気になり自分から話しかけるのが恐い時があります。家族や知り合いから「もっと積極的になれ」「自分から話しかけろ」と注意される時がありますが、それでも私は自分のそのような部分を変えようとは思いません。これは自分らしさでもあり、無理に変える必要はないと思うからです。相手から話しかけられても、私が相手について知りたいという気持ちがあれば、友達になれる可能性は大きいにあります。自分のペースで自分の心から楽しめる事をやるべきです。

私は四年次に中国に来てから、新しい夢を見つけました。それは中国の大学院に通い、高校生時代から興味のあった国際関係について専門言語である中国語で学び、日本と中国を結ぶ架け橋になる事です。それと同時に、引き続き更に多くの方と友達になりたいです。

大塚 笑（おおつか えみ）

2002年茨城県神栖市生まれ、2020年4月北京外国语大学入学、コロナの影響により、大学3年までは日本でオンライン授業を受けていた。2022年10月から現在まで中国に留学している。小学生の頃から英語が得意で、将来は外国語を学び、関連した仕事に就きたいと思い始めた。